

## 大木喬任遺著『進行論』について

重松 優\*

### はじめに

明治25年秋、教科書検定の内部書類が新聞に暴露されるという事件が起こり、その漏洩元となった枢密院議長大木喬任は辞任に追い込まれた。それから死去するまでの7年間、大木は錦鶏間伺候の閑職にとどまったので、維新草創から文部卿・司法卿を歴任したその政治生命は、明治25年に終わったと見ることも出来る。新聞には時折、大木の消息が報じられたが、そこに現れる大木の姿は、別荘をめぐり詩歌に親しんで余生を送る隠遁者を思わせる。

しかし実際には、大木は全く無為のうちに晩年を過ごしたのではないらしい。史料によると、大木は松隈内閣に肩入れして復権を期し、また佐々友房等の帝国党、あるいは谷干城と提携する機会もあった。しかし、それらは実現することがなく、大木は結果的に引退を強いられたような形のまま、公生活を終えた。

そして、隠れた政治活動の他にもうひとつ、老境の大木喬任が取り組んだものが、著述である。

憲政資料室大木喬任文書に「大木喬任ノ人世ニ関スル意見未定稿」と題される草稿が数本

残っている。『進行論』と題されるはずであったこの一編が<sup>(1)</sup>、後に周囲の人々が「遺著」と呼んだものである。それは一種の哲学書で、大木は自らの手で原稿を書き、推敲を重ねた。未完ではあるが、大体の考えを知るほどには整理されている。

同時代の政治家には、西郷隆盛『南州翁遺訓』や副島種臣『精神教育』など、哲学の領域に踏み込む著作も少なくない。しかし、それらは皆断片的な人生訓であって、世界観から文明論まで一貫して説き起こすような著述は、筆者は寡聞にして他に例を知らない。『進行論』は大木喬任研究に必須の史料であるが、明治国家をつくりあげる立場にあった人々が、いかなる精神性に立脚していたかを考えるにあたって、大きな参考になるはずである。

本稿では、『進行論』についての諸問題を検討し、紙数の許す限りで翻刻紹介を試みたい。

### 一. 『進行論』執筆をめぐって

明治31年4月19日、大木喬任が67歳を迎えた年の春、芝茸手町の大木邸で観桜会が開かれた。旧佐賀藩士で在藩時代から大木と親しく、維新後は長く判事をつとめた荒木博臣は、この

\*早稲田大学大学院社会科学部 博士後期課程2年(指導教員 島 善高)

会に遅参して、食事の開始が遅れたではないか、と大木に小言をいわれている。

来客が散じた後、大木は荒木に『進行論』執筆のことを漏らした〔荒木 1901〕。

衆賓が帰宅した後で、大木公は拙者に向けて奇ら敷も貴公は宗教の事を何う思ふか、又人間の希望は何であるかと尋問を受けたから、拙者人間の希望は第一政権を執る事である、政権さへ握れば他の事は何成共意の如くならさるべからずと、斯答へた処が、大木さんは、いや其様な茫漠たる話では駄目だ、人間万事欲望ならざるはなしであるから、凡そ現世の幸福を希望せざるものはあるまい、釈迦は現世の幸福を得られざりし故に未来の幸福を説いた、未来の事を説いても幸福は得られぬ、耶蘇基督も亦然り、現世にては不遇である故に未来の事を説いた、

孔子は未来の事を説かず、また現世の幸福をも得られなかった、只た道を以て説いた、而して現世の幸福をば別にして説いたが……三聖人の説く所ものは皆な非なりと思ふから、自己は現世にて幸福を得られると云ふ事を書いた、ちゃんと書いた、君は学者であるから君に丈けは是非とも見せると云はれた。

大木は国学者木村正辞、荒木と同じく佐賀出身の司法官高木秀臣にも、相談を持ちかけている〔木村 年不明〕。高木秀臣は特に『進行論』の目論見を説かれ、さらにまた大木自身による草稿の朗読を聞いた〔高木 1900a〕<sup>(1)</sup>。

<sup>(原文ママ)</sup>  
本々自分の積りでは經書のやうに一字一句の中に無量の意味を含蓄して居るやうに作り上げ、其に何うでも註釈の出来るやうに致す見込みで有つたのだ。して其れが出来上れば洋文では英仏独三体の文章に訳して広く外国にまで出そう、洋人にまで読ませよう、と云ふ位の意気込であるから。そうともそうとも漢文は勿論の事さ（中略）

此事は誰れも知らないが病氣になって少し前の事で有つたが意見書を書いたから、<sup>自分</sup>自己が読むから聞いて呉れると云つて直立して読み初めた。これは西洋館の二階で有つたが誰れも他に聞いているものは無つた。其処で読上げて終ふと此の意見は貴公何う

思ふかと云ふから拙者大いに反対を致した処が逆鱗に触れてな、仲々腹を立つ<sup>(原文ママ)</sup>た、真赤に成つて怒つた、あんなに怒つた事も奇らしいと思ふ位で有つたよ

大木の郷友たちの心配は、『進行論』の内容もさることながら、何事にも慎重な大木の筆が遅々として進まないことであつた。また、大木は明治21年に痔疾の手術を受けてから、決して健康とはいえなかつた。『進行論』の噂を聞いた大隈重信は、「いくら気が長いと云つても大抵程と云ふものがある、人間の寿命にも限りがあるからな」といい、高木秀臣はもっとあからさまに、いったい何時まで生きるつもりか、孔子の『春秋』の真似はとても出来まい、それよりは大抵にして書いた方がよるしい、と直言して、大木を怒らせている〔荒木 1901; 高木 1900b〕。

明治32年9月、大木は前触れなく卒倒し、そのまま立つことはなかつた。大木の死後、『読売新聞』は大木が発病の前夜まで、少壮期の著作を出版するべく校正にあたっていたと報じた<sup>(2)</sup>。『進行論』の他にも、書き残したい事があつたのだと思われる。大木は死の直前まで、執筆に精魂を傾けていたのである。

## 二. 「進行」の思想とは何か

『進行論』の柱となる思想は、揺るぎない現実主義と、「進行」の語に表される通り、人類未来の肯定である。大木が見るところ、個人の幸福も、国家を頂点とする社会生活の現実に求められねばならない。一方で、全くの国家万能主義が理想とされるわけではないことは、第七章の記述から推量できる。ただ、何分にも『進行論』は未完で終わっているから、日本の将来はどう

あるべきか、個人は如何に生きるべきか、『進行論』十章以降、大木の思想が具体的にどこに向かうのか、不明のままとなっている。

『進行論』解説の一助となる史料に、『真心経』がある〔大木 1897〕。これは大木喬任の三回忌に、嗣子大木遠吉が小冊子にして関係者に配布した経文で、大木喬任による序文が冒頭に掲げられている。そこには明治30年、高野山の老僧が病床の大木を訪い、真心経の一卷を託していった、真心経は龍樹（ナーガールシュナ）が後世のために秘匿した經典である、と説かれる。ところが遠吉によると、『真心経』を撰したのは大木喬任自身であったという。なぜ大木がかかる創作の体をとったのかは、現在では憶測の域を出ない。

『真心経』は、多くの文言を般若心経から借り、それをさらに論駁する形式をとる。「有情相」（『進行論』の「人世」と同義）の諸法は全て実相である。「空」と「色」は峻別され、般若心経が否定する五感と意識界は全て肯定される。そして、意識界を主宰する「心王」の働きによって、人間は生きることが出来、諸悪は滅せられ、「進行」が可能になるという。「能群」、「所群」をはじめ、『真心経』には『進行論』と共通する概念がいくつも見られることは興味深い。

意識界。心王居焉。住於自在宮。名礼會葬羅古餐。大慈大悲。有大威力。有大光明。能於光明。照諸相織微。能發大慈大悲。斥諸惡念。乃至生悔苦漸慙。令滅惡。

嗚呼善男子。善女子。百千萬億億無量。是一徹心。是一徹想。以一徹心一徹想故。得成能群所群。以得成能群所群故。得弗耕者食弗織者衣。於是有縁有境。造種種色相。縁有深広。境有親（親立てテ）□。縁亦無量。境亦無量。唯心王宰之契於理。使無所戻。能除一切

惡。真實不虛。真心自在安住。有情諸法。進行光明臻仏土。

七重欄楯。七重羅網。七重行樹。皆是四宝。周匝圍遶。

咒曰。揭諦揭諦波羅揭諦進行進行進益行菩提娑波訶。

（意識界、心王の居るなり、自在宮に住む。名は礼會葬羅古餐。大慈大悲、大威力有り、大光明有り。能く光明に諸相織微を照す。能く大慈大悲を發し諸惡念を斥る。乃至、悔苦漸慙を生じ、惡を滅せしむ。ああ善男子、善女子。百千萬億は億無量なり。これ一徹心なり。これ一徹想なり。一徹心一徹想を以つての故に、能群所群を成すを得。能群所群を成し得るを以つての故に、耕者に食せしめず織者に衣せしめず。ここに於て有縁有境。種々色相を造す。縁は深広に有り。境は親□に有り。縁も亦た無量なり。境も亦た無量なり。ただ心王のみ之を宰どり、理に契い、戻る所無からしむ。能く一切の惡を除く。真實虚ならず、真心は自在に安住す。有情諸法、光明に進み行き、仏土に臻る。

七重欄楯。七重羅網。七重行樹。皆これ四宝なり。周匝し圍遶す。

咒曰く。行ける者よ、行ける者よ、彼岸に行ける者よ、進み行け、進み行け、益を進め行け、さとりよ幸あれ。以上の読み下しは筆者による。）

末尾の咒に見られる通り、大木は人間の「進行」について、ほとんど宗教的な確信さえ抱いていたのではないかと考えさせる。大木喬任は頑迷な国体論者、万事において保守的な人物と周囲からは思われていた。だが、その心底に人間社会の進歩を基調とする前向きな世界観があったことは、大木の事績を評価するにあたって、決して軽視できないはずである。

### 三. 大木喬任著『進行論』翻刻

これまでに確認できた「進行論」草稿は、憲政資料室大木喬任文書・書類の部47以下の8本、全て大木の直筆によると思われる。草稿の

相関関係を推測するに、まず一章「人世の目的如何」が、47-12、47-15として成立した。それから47-10（一章、五章～十章）と47-11（二章、四章ほか）が書かれ、構想がまとまってきたらしい。十一章以降は確認できない。ここで全体が四章五章を境に分割され、前半部は47-18、47-13と二度改稿され、後半部は47-17として整理された。そして47-14において、ここまでの清書が始められたが、七章の終わりを目前にして筆が止まっている。

翻刻は最終稿と思われる47-14に、47-17から九章を補した。紙数の都合のため、遺憾ながら五章の一部と八章十章、加えて多くの原注を割愛した。また、適所に改行、句読点とふりがなを施し、原文のカタカナをひらがなに改めた。

## 第一章 人世ノ目的如何

四海の広き古今の遠き人其間に生々し千状万態是れ之を人世と云、

人世とは人類有情の万衆を総合したるを云、国家をなす以前と以後とに拘らず通して三世を汎称したるものと知るべし、猶人間世と云わんが如し、則是有情相、

吾人は如何なる観相を以て人世の目的即其希望を判断せんとする乎、嗚呼是<sup>まこと</sup>に<sup>みやす</sup>観易きものにして人孰<sup>いずれ</sup>か其目的即其希望は最大幸福を遂ぐるを欲せざるものあらん乎、即ち知る人世の目的即ち其希望亦最大幸福を遂ぐるを欲するに外ならざるを、

突然之を<sup>よむもの</sup>読者英国哲学者<sup>はまかす</sup>吐柏を嘗め来りたるものと思わん、後数章に於て其然らざるを解せん、

然れとも他<sup>か</sup>れ等は此観易きものを以て無稽の速断とし之を擯排拒斥するならん、以為く人類

の幸福は一部の占有者に帰すべきもの而已、たとひ人類各自の目的即其希望を以て人世の目的即其希望なりと観するも古来事実の以て其目的希望達し得しものなきを<sup>いかん</sup>奈せん、人類の多数は常に屈辱園中に接息し若しくは其財産若しくは其膏血若しくは其肝腦若しくは其生命挙げて以て之を一部の幸福者供用すること屢なり、故に人世は人類各自の目的即其希望と共進併行するを得べからず、之を詳言すれば人類の幸福は一部の占有者に帰すべきものなるを以て人世は概して幸福を望むべからざるものなり、

此観察者也事実の最照著なるものにして、古来哲人或は之を征戦に、或は之を宗教に或は之を政法に或は之を学説に甲是乙非参差回互、其人世に現する所の情相、動もすれば此観察也跳梁するあるに似たり、然れとも此観察を以て人世を断せん乎、人世は暗黒敗壞のみ、何そ人類の尊きを観ん哉、

抑他等の扱て以て観察を下す所の事實は貪見狼戾誤謬奸錯より成立せし影事を捉ふるものにして、安んそ道理の進路を遮闢し以て人世をするを得ん乎、且夫れ歴史の人世に現するもの五千年、是れ短時と云にあらすと雖も人世寿の曠却に比すれば今は乃ち是れ踈<sup>あかつ</sup>の時にして尚ほ乳蘇の味釣初の月の如きなり、安そ知らざらん其曾て事実とする所の貪見狼戾誤謬奸錯なる影事は、転して円満無欠完全安定の域に進むべからざるなきを、

旭日涛を開て<sup>あかつ</sup>暁き枕上の窓を叩き、虞淵紅を没して爛星天に敷く、春花芬芳秋月光輝、夏去冬来り代謝環の如し、電雷光を放て雨冬穫の田を霑し、寒温平を執て風眼曠の気を散す、緑山翠峰碧海流川四大綱細元素六八、大哉至哉、  
乾坤万物資て始め資て生す、之を生し之を生<sup>(原文ママ)</sup>

し、之を生して息ます之を生して息まざるは仁の至也、偉哉乾坤は万善の宗、

而して吾人人類靈能の心性を具へ以て天地の間に生々し以て群生の首たり、天地の大徳も人に依て顕れ天地の功用も人に依て明なり、知る是れ天に継ぐものは吾人人類の外他あらざるなり、故に天の善を承け以て善を行ふ者は吾人人類の他豈他あらん乎、

鳥山にあり、魚淵にあり、人は善に接て其生を遂く、人は善に棲まされば其生を遂くるなし、吾人が究竟推考せんとするものは善をなす(原文ママ)の法方にあり、

## 第二章 善の定義

夫れ圓宇中に充塞するものは生々至仁の妙用にして即是れ万善の宗とす、故に善の人世に現するもの五の生義に源く、一は生を益し、二は生を進め、三は生を助け、四は生を持し、五は生を害せず、而して此五つのも能所自他本性作用を包兼す、

凡宇宙間の事物、其大は会合、其小は個々此五の生義に源くものを善とす、之に反するものは悪なり、故に吾人の善を云ものは一隅に局拘し懸て而して易らざるが如きものを云に非らざるなり、

## 第三章 何をか人世の幸福と云

艶花緑樹、能く走る者能く飛者とぶ及能游者およぐをして心意あらしめば將に吾人に向て云わんとす、飛禽走獸草木游泳のものと雖も圓宇生々園中に生をなすもの也、即ち其希望者也、豈生を欲するにあらざるなからん乎と、

吾人人類靈能の心性を具へ其身内に充塞するもの及其身外に圍包するもの皆生々に因縁せさ

るものなし、即知る生存乃至遂生は吾人人類唯一の必要にして人類の幸福即人生の最大幸福と云べき也、

斯の如く説き来れば学説家者之を以て浅近劣議とし必ず之を擯排すべし、以為く人世羨むべき生存は人類の最大幸福なり、或は以為く実利頂天是れ人類の最大幸福なり、或は以為く菩提解脱是れ人類の最大幸福也、

凡そ幸福を論する紛差複雑充梁汗牛一決するを得ず、是れ個人につき以て其高点を究竟せんとするの結果にして、焉ぞ知らん乎、人類聖凡貧富の別は千差万種、賢は聖を希ひ聖は天を希ふを、故に其高点を究竟せんと欲し三十三天に至る素より怪むに足らざるなり、然れとも是れ個人に対し開導誘掖するの学説に外ならざるを以て吾人の云ふ所の計宗と相關する事なきなり、

夫れ圓宇生々園中一切有情の人類を概観せば、即一切有情の人類に通貫するを以て計せざるべからず、故に其高点を見るを得ずして寧ろ其平点に牒するは人類をして一人世に遣すなからんが為なり、

之を総言すれば吾人の所謂人世の幸福とは一切有情の人類に尤必要なる生存乃至遂生に対し其名を冠せしむに過ぎざるを知るべきなり、但生存遂生両事に非らず、而して可観なるものあり、不可観なるものあり、進益自他人力に依して之を全ふす(可観不可観)の生存は遂生に至る也、幸福とする所以なり、

## 第四章 人類の幸福を得る方法如何

吾人は吾人人類の幸福を得る方法を開説するに方て為に涙を灑て痛歎愍惻に堪へざるなり、

嗚呼吾人人類幸福を得るの方法を究竟すれば

唯是一個狹隘の道路あるに過ぎざるのみ、況乎  
荆棘榛々悪草蔓々猛獸獬々織羅走々熏習相襲い  
常に其裡に横行するあるを悲しまざるを得ん  
乎、

請、其道路なるもの、成形如何を説かん、

抑前章既に幸福なるもの、事實は生存遂生の  
事なるを顯す、試に思へ、園宇生々園中に棲息  
する吾人人類をして幸福即生存遂生を離れしめ  
ば復園中のものに非らざるは言を俟たざるな  
り、

故に人類は雨を防ぐに居なかるべからず、寒  
を温むるに衣なかるべからず、飢を療するに食  
なかるべからず、而して食を得る亦必しも自ら  
耕に非らざるなり、衣を得る亦必しも自ら織に  
非らざるなり、居を得る亦必しも自ら造るに非  
らざるなり、

而して眼耳鼻舌身意の如き生々界中必要の具  
(仏界之れなしと雖も)乃色声香味触法なかるべ  
からず、故に目は美觀を視るを欲し耳は美声を  
聞くを欲す、是に於て觀に文章あり、聴に□  
音あり、

況乎事物の進新便を吾人に与ふる者勝て数ふ  
べからず、海を走り陸を飛び、万里の信百里の  
嘴、或は虚氣を獵して船を作り或は雷神を役し  
灯を点せしむ、嗚呼惟れ此の果を得る其因其れ  
為にある、誰か亦孤居独棲に於て之を得ると思  
わん乎、

乃知人類幸福を得るの道路者也能群所群に  
在るの外他にあらざる也、能群とは是れより群  
するを云なり、所群とは彼れより群せらるゝを  
云なり、之を換言すれば互に群するなり、即同  
群なり、即ち共存なり、即ち共進なり、即ち共  
益なり、故に人類一日も群なければ則人類は有  
るを得へからず、故に人類幸福を得るの果は人

類同群の因に得るや明なり、

而して蜚蝶の野に躍り蟻蝮の甘を逐ふ、人類  
の群豈に斯の如きを云わん乎、吾人人類靈能の  
心性を有す故に人類の同群は統整にあり、統整  
の成形国家を現す、国家は則人類同群の現相に  
して人群統整の器物なり、

是に於乎吾人人類は星を戴き露を飲み直ちに  
園宇を以て家とするを得すして而て必ずや国家  
に棲息するの外復他路あらざる也、之を再言す  
れば吾人人類幸福を得るの源同群共益にあり、  
同群共益の成形は国家とす、

故に吾人人類苟も国家を離れ復た同群共益を  
得べからざるは言を俟たざるなり、嗚呼国家た  
るもの其責重且大なりといえども人類幸福を得  
るの道亦狭哉隘哉、彼の魍魎を恐れて莊園の鵬  
となり直ちに乾坤に逍遙せんと欲するも東君の  
允せざるを奈かんせん

## 第五章 生徒嗟歎す、国家主義個人主義

何の国を問わす人生れて六才必ず小学に入る  
(未た必しも然らず)、生徒あり(小学生徒ならん)、  
歎て曰(何の国の生徒なるを知らず)、教師也者口  
を開けは即曰国家、一も亦国家、二も亦国家、  
我未た国家の如何を想像し得る能わす、退て而  
之を父に問、父怒て曰、我れは個人を至とする  
もの也、何ぞ国家を云、我已に如何なるか是国家  
なるを知らず、而して又個人の何たるを解せ  
ず、況乎師に従わん乎父に叛く、父に服せん乎  
師に叛く、豈悲しからずや、

此歎声や延て生徒の間に転伝し生徒間一の語  
調を現し、曰く国家主義曰く個人主義、遊戯の  
間猶之を称説するに至る、

是に於乎、説者甲乙丙丁あり、吾人は此四説  
を陳ねて以て生徒の嗟歎に酬いん、

(中略、ここでは国家主義と個人主義をそれぞれ至当とする二説、加えて中間的位置に立つもの二説が示される。)

嗚呼此四説孰か是孰か非、吾人の觀念何の説に存するや、後來說く所に於て之を了せん、

## 第六章 生徒<sup>こた</sup>対へす

生徒あり、故ありて予に面す、傍ら一本を携ふ、須因頓氏万国史<sup>(4)</sup>也、予問て曰、吾子の祖先万国史中何の人種に属する乎、

生徒対へす、

曰く、吾子亦日本人也、吾子の祖先亦万国史中にあらざるべし、日本の開始に方て吾子祖先等の觀念と万国史中各人種の觀念と径庭ありとする乎、

生徒対へす、

曰く之れありとすれば其別如何、

生徒対へす、

曰く万国史中各人種暗黒より文明に移る、其様如何

生徒対へす、

曰く其文明に移る何物か之が主腦たる、

生徒対へす、

曰く吾子人類自ら称して尊高なりとす、亦血肉横目縦立を以て尊か、抑亦靈智の心性を以て乎、

生徒対へす、

曰く日東に出て西に走る、星西に現して東に流る、是物質の動也、物質の外世界は何れに向て進行す、

生徒対へす、

曰く吾子亦日本人也、日本人よ吾子よ刻後進行の方何邊に面す、

生徒対へす、

## 第七章 自治之果

吾人は前已に人類の生存幸福は国家を離れて復他路あらざるを正顕す、而して甲乙丙丁説者の是非今暫之を閑し爰に最大至善の国家ありと仮定せよ、若民衆ありて衣なく食なく室なく居なき者ありとせん、国家は常に之を給養するを以て道とする乎、

嗚呼何そ斯の如きを云わん、自営自活は人類の素分也、何そ得て而して之を給せん、是に於て乎自活の果は競争起こる、固り其所也、

東君亦之を寮ともする能わす、ただ貽ふに同衆同感の通情は我に敵するの抗力を有し各自ら其境を知るの靈能を以てす、

人類同群共益の境無量なりと雖も国家の万衆に対し万衆の国家に対す、其境尤至重なりとす(治者被治者の境)、是故に知る最大至善の国家は其為此にありて而て彼れに非るなり、

## 第八章 (見出しなし)

(省略、本章では「過去の師」である歴史を知る必要が説かれる。)

## 第九章 (見出しなし)

間浮堤洲有情色相の始めて記に現するもの明暗黒白其軌轍を同せず、而して其大部多くは是暗黒、然れとも有情特有の靈物は何そ一隅に頑住せん、進んで至明の域に達せずんば止まざるなり、或は個々或は会合、其進々行々の相之を例るに帰鳥千群回互<sup>(原文ママ)</sup>□□或は急、或は緩、或は遅、或は速、其前なる者後れ其後なる者前むもの、如し、吾人素り其宿林の在る所尚甚遠<sup>とおく</sup>して幾百千里なるを断す能すと雖も然れとも其途は知るべき也、

過ぎ来る五千年紛錯繫属繞歩廻進の相法は將

に吾人に向て指導する所あらんとす、吾人は日本人也、日本人よ日本人は日本過去の指示する所に於て最適切に最緊要なり、老朽を以て自暴自棄すべからず、山にきこりする樵人も海にすなとりするあまひとも数ならぬ身をあきらめて我が日の本の遠き本より過きこしさまのいかなりしやを思ひてゆくさきの道を踏みまよふへからざる事を忘る可からず、

支那は隣邦也、月土亦之に次く、其支那より諸越す所の有形無形の物、吾人祖先に如何なる浸染を与へしや、其利となり害となる皆本土の所諦に基くありて支那及月土過去の師の示指する所亦甚適切なり

日本曾て幕を下す三百年、今や已に之を擧ぐ、於是乎其自ら文明と驕称する所の西州と日に相親善而して年尚浅し、吾人は如何なる觀念を以て相伴わんとす、若し其本を知らずして其末を採り其形骸を恋慕して其観るべからざる者(原文ママ)を觀ず、今にして真を驗するなくんば其誤りや深らん、即西州過去の師亦甚緊要なり、

## 第十章 (見出しなし)

(省略、本章では西洋史上の凄惨な社会相克が概説される。)

[投稿受理日2005. 11. 25/掲載決定日2005. 12. 1]

### 注

- (1) 生徒との問答篇である六章末尾の注(本稿では省略)に、「維摩教は小乗を破するに長者を仮り進行論は真正を顯すに生徒を仮り以て通篇の開結を示し傍ら長者生徒反対の果を表す」とある。
- (2) 高木秀臣の回想には、「遺著」あるいは「意見書」として表記されるが、それぞれの記述を考えるに、どちらも『進行論』を指すと思われる。

また、大木が『進行論』を書き始めた時期を高木は31年11月頃とするけれども、初期草稿である

憲政資料室大木喬任文書・書類の部47-15は、明治21年11月に病気で仏留学から戻った長男逸太郎についての書翰下書と共に綴じられており、もっと早い段階で執筆が始められた可能性もある。

(3) 読売新聞明治32年10月2日号には『獎言』『勸言』の二編とある。『獎言』は憲政資料室大木喬任文書・書類の部180に確認できるが、『勸言』の所在は不明である。

(4) ウィリアム・スウィントンの『万国史』は明治20年頃から数度、翻訳紹介されている。

### 参考文献

- 荒木博臣. 1901. 「荒木博臣殿御談話拜聴筆記」, 『談話筆記』中巻所収, 国立国会図書館憲政資料室大木喬任文書・書類の部69-2.
- 大木喬任. 1897. 『真心経』大木遠吉.
- 大木喬任. 年不明. 『進行論(大木喬任ノ人生ニ關スル意見未定稿)』, 国立国会図書館憲政資料室大木喬任文書・書類の部47以下.
- 木村正辞. 年不明. 「木村正辞殿談片」, 『談話筆記』上巻所収, 国立国会図書館憲政資料室大木喬任文書・書類の部69-1.
- 高木秀臣. 1900a. 「高木秀臣殿譚話」, 『談話筆記』上巻所収, 国立国会図書館憲政資料室大木喬任文書・書類の部69-1.
- 高木秀臣. 1900b. 「高木秀臣殿談話筆記訂正」, 『談話筆記』上巻所収, 国立国会図書館憲政資料室大木喬任文書・書類の部69-1.